（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	野田 実希
論文題目	職業人の病休体験についての臨床心理学的研究 ―自己と「語り」をめぐる質的研究の展望から―		

（論文内容の要旨）

本研究は，職業生活においてメンタルヘルス不調により休職に至った職業人のたどった内的過程に対する理解を深め，支援につなげていくための研究である。特に「わたし」という自己のありように着目し，語りを通して職業人の病休体験について探究することと併せて質的研究という方法論そのものを再検討することも目的とする。

序章では，職業と自己の観点から，個人の病休体験を探究する意義を述べた。近年では，職業を通した自己実現やアイデンティティ形成をはじめとする自己理論が提唱されているが，メンタルヘルス不調によって病休に至る職業人は，そうした「自己」の可能性からも疎外されてしまいかねない。その理解には個人の体験に基づいた「わたし」の語りを聴きとっていく必要がある。

第一章では，本テーマに関する文献研究を行った。その結果，休職後から生じている職業人としての自己の揺らぎは，職場復帰（復職）の意思表明や復職をした後にも生じていることが示された。その一方で，実際の復職支援につながるまでの期間や，復職支援プログラムを利用しない職業人の実態については明らかにされていないことが多い。そのために病休にともなう体験と自己の揺らぎへの理解を深めるとともに，個人の自己の在りようとその変化を細やかに見立てていく必要がある。

第二章では，本テーマで用いる質的研究について42本の論文を対象に論じた。質的研究法は臨床心理学においては，理論的研究における手法というよりも，むしろ心理臨床実践において，事例研究の実証性を担保する手法として論じられ，臨床に応用されてきた。しかしその位置づけはいまだに曖昧である。また質的研究と事例研究が混在する一方では、質的研究の意義についてはあまり焦点化されていないことが指摘される。質的研究は，豊かな語り（ナラティヴ）の生成の場であるため、本研究において採用する意義が認められた。

第三章から第五章までは，職業上のストレス負荷を契機としてメンタルヘルスに不調をきたし，休職に至った職業人に対して，一連の質的調査研究を提示した。第三章では，そのような5人に面接調査を実施し，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いて検討した。その際，「働くわたし」の自己意識に焦点を当てた。その結果，メンタルヘルス不調者では，自己意識が職業領域に集中して注がれ、職業的自己を断念出来ないために、心身の異変の察知や病いの認識が遅れて受療が遅れるという事情が明らかになった。

第四章では，第三章で検討した病休者が，休職後，どのように復職や回復に向かうのかについての体験を，再びGTAを用いて検討した。その結果，休職～復職までに役割的自己の変化や、より内的な主体的自己の変化が見いだされた。そして回復へと向かうプロセスでは，職業人が，それまで没頭していた働き方を見直すことで働き方が再構築され、「働くわたし」以外の新たな自己を発見していったことが明らかになった。

第五章では，第三章・第四章で扱った単回の病休者ではなく，3回以上休職を繰り返す頻回病休者7人を対象として，主題分析（TA）を用いて分析を行なった。その際，個人の自己・病い・職業に対する捉え方やイメージに焦点を当てた。その結果、

彼らは挫折体験が蓄積され、多くの喪失の内に置かれていることが示された。そしてその自己像は，自律性や統制感を失い，それにより自信を喪失し，さまざまな関係性から回避している状態を示していた。そしてかつての自己像は，病休によって過去と現在で分断され，仕事が出来ていた理想の自己像と働けないと烙印が押された恥ずべき自己像とに分かれている事情が示された。

第六章では，Frank, A. W.の対話的ナラティヴ分析（DNA）について論じ、語りを構成されたものとしてでなく、そのものに想像力を促す性質があるものとしてとらえ、語り手を対話的に読み取っていくという特徴について、その有用性を示した。そして第5章の頻回病休者の語りを回復の語り、混沌の語り・探求の語りの3つの類型から捉え、さまざまな語りの様相を見いだした。この、語りは常に流動して完結しえないものとして捉える視点から語りを細やかに見ていくことで，語りにならない語りを聞いてくための糸口となることが示された。

第七章では，本研究の総括として，メンタルヘルス不調により休職した職業人の主観的体験ならびに質的研究の臨床的意義について考察した。そして語りの生成の場として質的研究を捉えることで，心理臨床にも通じる質的研究の臨床的意義と独自性を論じた。まず，調査面接と臨床面接の基本的な差異について概観したうえで，両者の共通性と差異を検討した。すなわち，語るという発話行為に目を向けたとき，語りは聞き手と語り手によって共同生成されるという点において共通性をもつ一方で，調査面接においては，研究者の設定するテーマが押し付けられる一方では，語り手が過去への応答責任をもつというパラドクスが存在する。このようなパラドクスは，他者の生にまなざしを向けていくときの視点や理解の糸口を提示するものであるとともに，心理臨床における「聴く」姿勢を見つめ直すことにもつながることが示唆された。

このように，本研究では，質的研究の方法論的検討と職業人の病休体験についての調査研究を組み合わせて論じることにより，病休者が生きるさまざまな「わたし」という自己の在りようと，語りの多声性という重なりを示した。すなわち病休者の支援にあたっては，当事者の自己や語りを多声的・多層的に捉える姿勢が必要とされるのである。

終章では，本研究のまとめと今後の展望が示された。質的研究の場で，職業人が自らを病休者として自己定義し，その体験を他者に伝えようとする在りようは，そのように生きる者として証言することでもある。その語りは，聞き手の物語・物語りと共鳴することにより，多声的な，生きる道筋が描かれていく。質的研究では，個人が何を，どのように語り，また語る行為そのものにも着目し，語りを細やかに捉えていこうとする。このことは心理臨床家がどのように語りを聴いていくかを問い直していく営みにつながると考えられる。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本研究の特徴は、従来は病欠者、病休者としてひとまとめに扱われ、職場においてはともすれば落伍者と見られてしまう傾向にある人々に対して、その内面についての語りを綿密に聞き取り、そこに実に多彩な人間模様があり、どの病休者の体験も決して同じではないという至極単純な、しかし極めて現実的でかつ奥深い理解を著者が深めていったことである。いわば病休に至った人々の側に立ち、彼らの人間としての個別性を理解するという作業を徹底した研究であると言える。

そしてそのことは彼らに対する援助手段を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。それは彼らに心理的な手を差し伸べるためには、まずは彼らの世界に分け入り、その語りを聞くことから始めるべきであるということである。しかしそれは治療者がそこに意味づけや一定のストーリーラインを読み取ることではなく、完結しないストーリー、未来に向かって開かれた語りとして聞き取る必要がある。

さらに著者は本研究において、研究対象者の語りを聞くことを通して、質的研究とは一体何か、という問題にも迫っている。すなわち研究対象についてだけでなく、研究手法そのものにも問いを向け、それを独立した研究課題として本論文に組み込んでいるのだ。

以上本論文の特筆すべき点について述べたが、さらに本論文において独創性を伴う論点として三点を挙げて論じたい。その第一点は、人はそれぞれ様々な「わたし」を有し、働くわたしはその一つとしての意味を持つが、真の意味で「働くわたし」の存在を見出すためには、「働かないわたし」の視点からの照射が欠かせないという逆説である。働くことに困難さや苦痛を体験する前には、「働くわたし」はいわば自然に、無反省に受け入れられていた可能性がある。しかし病休を経験することで、それは「働かないわたし」、「働いていないわたし」、との相対的な関係から捉えなおされ、その作業が職場への復帰の際に大きな意味を持つという所見である。

第二点目としては、単回の病欠を体験した人々と頻回の病欠を体験している人々では、きわめて異なる「わたし」像が形成される可能性を見出した点である。第二、三、四章では単回の病休から職場復帰した対象者について論じられているが、第五章では頻回の病休を繰り返した人に研究の対象が移される。そして後者の場合には二つの自己像が分裂して生まれ、働けていた自分はいわば理想化された自己像を形成し、働けていない自分を落伍者、失敗した人間として規定する恥ずべき自己が生まれるという発見があった。

これは頻回の病欠を体験している人々がどのようにケアされていくべきかについての重要な示唆を与えている。すなわち頻回病休をした人々の多くにとっては、職場復帰がその治療の目標では必ずしもないということになる。そこにはいわばハンディやトラウマを背負った人々に接していくという文脈が見出されることになろう。さらに言えば、人間は誰しも幼い時には働くことができず、また一時期働くことが出来ていても、最終的には病を得たり年老いたりして働けない存在となる運命にある。そしてその意味では働ける自己とはある意味で「かりそめの姿」という意味を持っているという視点を示唆しているようにさえ思える。

本論文の独創性として特筆すべき第三点目は、著者の研究が同時に向けられた研究法そのものへの省察によって至った立場である。著者の用いた研究法はその位置づけが難しいとされている質的研究法であった。この難しいテーマについて、その意義を掘り下げる中で、著者が最終章（第６章）で論じているのが、質的研究の中でもシークエンス分析に属するFrank, A.W.のナラティブ分析であった。このナラティブ分析の特徴の一つは物語を完結しえないものとして聞いていくことであり、それは

ある意味ではナラティブを脱構築する、理解しようとしない、という意味を含んでいるとも考えられよう。

これらの点で本論文は極めて高い価値を有するが、いくつかの問題点も挙げられる。令和２年２月５日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った際には以下の点が示唆された。それらは量的研究を質的研究の対立項とすることなく、両者の融合を図ることで論文の質を向上できるであろうという点、掲げられた事例の個別性だけでなく、診断やアセスメントの視点をさらに取り入れることで、臨床への応用性を高めることが出来たのではないか、などである。しかしこれらはいずれも本論文の価値を損なうものとしてではなく、その質を今後さらに高めるための示唆として提案された。そして口頭試問では質疑において的確な受け答えがなされた結果、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認められ、合格となった。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。